The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『断証決定集』と四重興廃思想

花野充道

静明のころの成立と推定されている伝忠尋撰の『漢光類聚』には、

観相の口伝とは、是れに重々の観相あり。一には別時の一念三千、二には常用の一念三千、三には臨終の一念三千なり。別時の一念三千とは、……行法の次第は、四箇伝法（決）の如し。……臨終の一念三千とは、是れに重々の口伝あり。委細の旨は四箇伝法決の如し。（旧仏全一七―七一）

という文がある。この中の「四箇伝法決の如し」とは、『修禅寺決』の「行門の一念三千に於いて三重有り。一には常用の一念三千の観、二には別時の一念三千の観、三には臨終の一念三千の観なり」以下の文（伝全五―八六）を指すと考えられる。

『漢光類聚』と同類姉妹の書とされる伝忠尋撰の『法華文句要義聞書』（旧仏全一六）にも、「住本顕本とは、山家大師、修禅寺の相伝日記に云わく」（二四〇）「山家大師、唐土に於いて四箇の相伝有り。其の中の止観の大旨とは是れなり。相伝日記に云わく」（二五二）「委しくは四箇伝法決の如し」（二六八）として、『修禅寺決』の文が引用されている。従って『修禅寺決』は、『漢光類聚』や『法華文句要義聞書』より早い時代の成立であることは明らかである。

その『修禅寺決』には、

一代八門の配立は、常途の所談の如く之れを思うべし。（同七七）

という文がある。この文について浅井円道氏は、日本思想大系『天台本覚論』の中で、身延山久遠寺所蔵の日朝所持の古写本と日意所持の古写本を底本として、

一代入門の廃立は、常途の所談のごとくこれを思うべし。（四九）

と校訂され、「金沢本・版本・伝全は『一代八門』。いずれにしても意味不明」と注記されている。しかし私は、この文は「一代八門の配立（廃立）」が正しく、それは『断証決定集』に説かれる次の所説を指していると考えている。

本師釈迦、大師より以来、乃至、荊溪、邃和尚、立つる所の八種の門は、一切を決定して、教門の実義、事理の体用を断証す。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

（伝全五―二五五）

この文の中に「本師釈迦」とあることから、「釈迦一代の教門の実義、事理の体用を断証する八種の門」が、「一代八門の配立」であると考えてよいであろう。そのように推定する根拠として、私は次の二つを考えている。

まず第一には、『断証決定集』には続けて、

其の八種とは、四重興廃において各の二種を立つ。故に爾前の帯権に両種の門有り。一には不即門、二には不離門なり。迹（門）中にも両種有り。帰真門と真空門なり。本（門）中にもまた両種有り。三千相対門と一体不二門なり。観心の二門とは、境智不思議門と還借有相門なり。

と説かれている。すなわち観心（止観）に、「境智不思議門」（境智不二門）と、「還借有相門」（還同有相門）とを分けているのである。そして『修禅寺決』にも、「一代八門の配立は、常途の所談の如くこれを思うべし」の文の直前に、

問う。若し止観の元意に依れば、生仏はもとより不二にして迷と覚の相無し。此の時何ぞ別に此くの如き劣相の観行を授けるや。答う。摩訶止観の意は、即事而真・有無不二に在り。上に明かすところの別行・常用等の三観は、即ち生仏不二の行相なり。此れを離れて別に止観の元意・生仏不二の行有りと云わば、是の処り有ること無し。有相を簡びて無相の一方を存ず。元意は無相の本心に住して還って有相に同ず。是れ諸仏の内証の実行なり。

と説かれている。

浅井円道氏は、『修禅寺決』のこの文を、「答う、摩訶止観の意は即事而真・有無不二にあるなれば、上に明かすところの別行・常用等の三観は即ち生仏不二の（上の行）相なり」と校訂されているが、それは間違いである。金沢本・版本のみならず、身延山所蔵の底本にも、浅井氏が気を利かせて挿入した「上」という文字はない。浅井氏が、なぜ「上」の文字を挿入されたかと言えば、問いの文中にある「劣相の観行」について、「現実に迷悟の別があるから修行の必要があるのであるが、今は迷悟不二の元意（理）に対して迷悟差別の上の立行を劣相という」と頭注されているように、「別行・常用等の劣相の三観は、迷悟（生仏）不二の上の迷悟（生仏）差別の行相である」と解釈されたからにほかならない。しかし、その解釈は間違っていると思う。

『修禅寺決』には、

一心三観とは、是れに教行証の三重有り。一に、教談の一心三観とは、……第二に、行門の一心三観とは、此れにまた四重有り。一には、本解の一心三観なり。謂わく、止観の行者はまず本解に安住すべし。法々塵々は即空即仮即中にして全く情念を離る。三観の妙理分明なるの時は、行ずる所も無く、証する所も無し。行証の時に於いて、何ぞ始末を論ぜん。内外並びに冥し、縁観倶に寂なれば、諸心の境を歴て起れども、更に執すること勿れ。二念は続かず三観に住す。是れ真の止観の行者なり。是くの如く無縁無得の三観の本解に安立して、三重の一心三観を修すべし。三重

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

の一心三観とは、一に、別時の一心三観とは、謂わく、……二に、常用の一心三観とは、……三に、臨終の一心三観とは、……。

（同六九）

と説かれた後に、前引した「問答」が挙がっている。従ってこの問答の文は、次のように解釈すべきである。

問う。若し『摩訶止観』の元意によれば、生仏はもとより不二であるから、迷と覚の差異はない。（従って、本解の一心三観だけで充分であるのに）、どうして別にこのような劣相の観行（別時・常用・臨終の一心三観）を授けるのか。答う。『摩訶止観』の意は、「即事而真」であるから、有相行（事）と無相行（真）は不二である。従って別時・常用等の劣相（有相）の観行は、そのまま生仏不二の（無相の）行相である。この有相の観行とは別に、止観の元意である生仏不二の観行があるとすれば、それは道理に反している。そうなれば、有相行を簡んで無相行の一方に偏することになってしまう。『摩訶止観』の元意は、無相（生仏不二・迷悟不二）行に住したならば、還って有相行を修するのである。これが諸仏の内証の観行である。一代八門の配立（廃立）については、常に論じられている通りにこれを考えるべきである。

このように解釈したほうが自然である。そして、このように解釈したならば、「一代八門の配立は、常途の所談の如くこれを思うべし」の文とスムーズにつながっていく。すなわち、一代八門の配立を記した『断証決定集』には、「観心門」に、「境智不思議門」（境智不二門）と、「還借有相門」（還同有相門）とを分別しているから、この分別を前提にして、『修禅寺決』では、「無相の本心に住して（境智不二門）、還って有相に同ず（還同有相門）」と論じているのである。

それでは、『修禅寺決』に説かれる「一代八門の配立」の文が、どうして『断証決定集』を指していると言えるのであろうか。それが私の考える第二の根拠である。

『漢光類聚』には、

慈覚大師の一代八重の口伝、これを思うべし。八重とは、一に不即門、二に不離門、三に断相帰真門、四に真如具法門、五に三千相対門、六に万法三身門、七に寂照不思議門、八に還同有相門なり。第一と第二は爾前経の意、第三と第四は法華迹門の意、第五と第六は本門の意、第七と第八は止観の本迹未分の所談なり。……天台一家の法門は、多途なりと雖も、この八重を以って落居とする所なり。

（同八―二五）

と説かれている。この文の中に、「慈覚大師の一代八重の口伝」と記されているが、『断証決定集』はまさに「沙門最澄説円仁記」と伝えられる書である。そしてこの書以外に、慈覚大師（円仁）が「一代八重の口伝」を記したとされる書は伝わらない。従って私は、『修禅寺決』の「一代八門の配立は、常途の所談の如くこれを思うべし」の文は、『断証決定集』を指していると考えるのである。

ちなみに『法華略義見聞』（旧仏全一六）にも、「慈覚大師、一代諸教の実義を決せんが為に、八門を作って分別す」（九）、「覚大師、四重の興廃を開いて八重、乃至三の十六義の法門

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

と為す」（四一）と説かれ、『法華文句要義聞書』（旧仏全一六）にも、「一代八門の覚大師の御釈、思い合わすべし」（一四三）、「覚大師の一代八門の口伝にも、止観は爾前本迹の六重の上にこれを立つ。謂わく、境智不二門と還同有相門なり」（二六七）と説かれている。

以上、述べてきたことから、『漢光類聚』を静明（鎌倉中期）のころの成立と仮定すれば、『漢光類聚』に引用されている『修禅寺決』はそれ以前の成立、すなわち鎌倉初期の成立であり、その『修禅寺決』に記された「一代八門の配立」が『断証決定集』の所説を指しているとすれば、『断証決定集』もまた鎌倉初期の成立ということになる。そして『断証決定集』→『修禅寺決』→『漢光類聚』という順序で中古天台文献が成立していったと考えれば、「四重興廃思想の展開」として年代的に穏当である。四重興廃思想は、日蓮が叡山に遊学した時には、すでに成立しており、日蓮は三十八才の時に著わした『十法界事』（一二五九年）に四重興廃の定型文を引用している。

それでは次に『断証決定集』に説かれる四重興廃の思想、および一代八門の思想について見てみよう。

まず蔵通別円の四教判に約して、断証（断惑証理）の不同が説かれている。続いて設けられた問いの中に、「四教の配立は、その義此くの如し」（二二三）とある文が注目される。ただ四教の断証を比べて論じているだけであるが、四教を比べれば（相対すれば）、当然、その不同について、浅深・勝劣を分別することになるから、それを「四教の配立」と言っているのである。「四重の興廃」や「一代八門の配立（廃立）」も、その意味するところは同じであって、「興廃」や「廃立」という語に、必ずしも「廃止して興こる」「廃止して立てる」というような強い意味があるわけではない。日蓮は、智顗の『法華玄義』の絶待妙釈の文をそのまま「四重の興廃」を説いた文として受け止めている。

次に注目すべきは、顕密判と四重興廃との関係である。「円教の惑相」について、

迹門……始覚の三惑を断じて本惑を断ぜず。……凡夫
本門……本惑を断じて一心の惑を断ぜず。……凡夫
観心……止観に一心の観を説く（故に一心の惑を断ず）……聖人
（同二三〇）

と論じているが、これは日蓮が『十法界事』（昭定一四〇）に、四重興廃の文を挙げて、「此れは此れ如来所説の聖教、従浅至深して次第に迷いを転ずるなり」と説いていることと同意である。

『断証決定集』には、さらに「顕密相対」しておよそ（要旨）次のように論じている。

顕密相対して論ずれば、顕密が等しいという義と、顕教が勝れ密

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

教が劣るという義がある。まず前者の義は、三密の行と一心三観の行を相対すれば、顕教と密教は異なれども、大道は同じである。密教の大日如来は顕教の一心であり、顕教の一心は密教の大日如来であるから、顕教と密教は等しい。次に後者の義は、法華経の本迹二門と大日経等は同じであるが、その上に顕教（法華経）は無相甚深の法（観心）を立てている。密教の意は、有相の「教」に執着して、如来の一心・（止観の）一心の義を知らないから、無相の観心・天台大師の内証を説く顕教が勝れ、密教は劣っている。（同二三一）

『断証決定集』のこの文は、密教の理同事勝の説に対抗して、円密一致の教判から、さらに一歩進んで法華円教の四重興廃の教判が成立したことを物語っている。

〈キーワード〉一代八門の配立、四教の配立、円仁、日蓮

（早稲田大学大学院修了・文博）

新刊紹介

芹川　博通

『芹川博通著作集　第8巻
—国家・教育・環境と仏教：叡智と指針—』

A五版・四〇四頁・本体価格六、〇〇〇円
北樹出版・二〇〇九年一月

NII-Electronic Library Service